

国際基督教大学

中期計画（2026年度～2030年度）

——日々のあらたな創造のために——

国際基督教大学（以下、ICU）は、第二次世界大戦がもたらした惨禍への深い反省の上立ち、キリスト教主義に基づいた高等教育を通じて、平和の構築に寄与する人を育てる目的で1953年に献学（建学）された。

開学以来、日本において、世界へ開かれた本格的なリベラルアーツ教育の先頭に立ってきた本学は、自由で開放的な学風を樹立し、大学構成員の一人ひとりが深い人間理解に支えられた多元的視座を持って真理の探究を志す場となるよう努めてきた。対話的なコミュニケーションと批判的思考（critical thinking）をキャンパスにおける日常生活のレベルでも、また、教育研究における学問的レベルでも大切にし、世界人権宣言に基づいた人間一人ひとりの権利を尊重し、多様性、公正性、包摂性を重視している。

21世紀に入って四半世紀が過ぎた国際社会において、いまだに人間は戦争や紛争を止めず、自由、平等、多様性という価値観と共にあるかに見えた民主主義もその内部に不寛容や分断を抱え込んでいる。

献学の理念として我々の目指す平和が脅かされている状況のなかで、本学は、その平和の基盤に、愛、平和の希求、赦しがあると信じている。すなわち、キリストの教えである「敵を愛し」、「自分を迫害する者のために祈る」（マタイ福音書5章44節）という愛、「平和を実現する人々は幸いである。その人たちは神の子と呼ばれる」（マタイ福音書5章9節）という教えにある平和を築こうとする心のあり方、そして、神の赦しと不可分の人間同士の赦し（主の祈り：「わたしたちの罪をおゆるしてください。わたしたちも人をゆるします」）である。

歴史的コンテクスト、および同時代のコンテクストのなかで、傷つけあった者同士は、平和が回復したあとにも心のなかに深い苦悩や憎しみを抱えている。戦争のない状態としての平和構築のプロセスと並行して、深い自己認識と共に心の平安や相互理

解をもたらす和解のプロセスがこれからの時代にはますます重要である。ICUは、キリスト教主義に支えられた「平和」に加えて、「和解」(Inclusive Reconciliation)の実現に寄与する人材の育成を、今回の中期計画における本学のミッションとして掲げる。それは、初代学長・湯浅八郎が「明日の大学」と呼び、今も我々がそう呼んでいる本学に息づいている「未来へのヴィジョン(夢)を持って生きること」(武田清子『未来を切り拓く大学』)を志向する精神の具現化でもある。

*

本学は2008年度に学科制(6学科)を廃止し、人文科学分野・社会科学分野・自然科学分野および学際分野の31専攻(メジャー)からなる1学部1学科制(教養学部アーツ・サイエンス学科; College of Liberal Arts, Division of Arts and Sciences)へ移行し、リベラルアーツ教育のイノベーションを行った。また、2020年度以降はArts and Sciencesの再定義を行っている。我々が実践しているのは、一般的に「Arts=文系」、「Sciences=理系」として区別された分野の融合や横断ではない。我々は、Scienceを、語源であるラテン語の動詞 *scio* (知る)、すなわち「知」、「知識」へ立ち返らせ、「サイエンス」については、文・理に共通する「未知のものを探求し発見し知のフィールドへ運び込む行為としてのScience」と捉え、またそのようにして発見された「いまだ形になっていない新しいもの」を「他者と共有できる形にする技術・学術」としての「Art」として「アート」を捉えている。このArts and Sciencesの実践を通じてリベラルアーツがみずからを日々あらたに創造するための計画が中期計画である。

科学技術の発展に伴い、我々人間は、地球環境、社会の環境と構造、そして現代文明のなかに生きる個々人の感性と思考と倫理観に大きな変化をもたらしている。絶えざる変化のなかで、より良い社会のためのさまざまな分野でのイノベーションと課題解決を実行できる人材を育てることは高等教育機関に課せられた重要な使命である。

リベラルアーツの学びにおいて身につける人間的な資質として、これまでも大切であり続け、不確実な未来においても変わらず重要であると本学がみなすのは、多様な

人々との深い交わりを通じて培われる包摂性である。そのためには、キャンパスにおいて学生の多様性を確保し、日常のキャンパスライフの経験を通じて包摂性を身につけるための環境を整えることが必要である。本学は、同窓生等からの寄付に支えられた給付奨学金制度を充実させるとともに、その他の施策を通じて、経済的背景や出身地域、国籍といった面で日本国内における唯一無二の多様性を誇る大学であることを実現しようと考えている。

ICUが実践する刷新された「Arts and Sciences」を、現代社会および来るべき社会において教育システムとして有効に機能させつつ、献学の理念に沿った形で新たな活動の地平を拓き、デジタル時代において、人工と自然の調和をはかりながら創造とイノベーションを通じて新たな価値を創出する思考力、感性、判断力、行動力を備えた人へと学生を育てる高等教育機関としての事業を積極的に展開することが、2026-2030年度の中期計画において本学の目指すものである。その方針に従って、2026年度からの5年間で、本学は教育体制、キャンパス・ライフ、Inclusiveな環境の充実ならびに学生の多様化をはかり、事務組織、同窓生サービス、ガバナンス体制の強化を行う。

国際基督教大学 学長 岩切正一郎

本中期計画の位置づけ

本計画は、今後5年間における本学の運営方針を定めるものである。

個別施策の採択や予算措置に関しては、認証評価への対応を含め、単年度の事業計画策定プロセスにおいて理事会または大学運営会議(UMC)での審議を経て決定する。また、本計画に記載のない事項であっても、本学の発展に資すると判断されるものについては柔軟に対応する。

計画の進捗は、事業報告等を通じて理事会・評議員会および教職員に共有し、広くフィードバックを求めながら、必要に応じて計画自体の見直しを含めた適宜の改善を行う。

基本方針

- (1) ICUの根幹にあるキリスト教信仰のエートスを維持・発展させる。
- (2) 現在の教育・研究事業を継続・強化する。
- (3) キャンパスライフの充実により学生の他者との交わりを豊かにし、和解力を育む。
- (4) 卒業生との連携を強化する。
- (5) Alumni Giving Cycleを確立する。
- (6) 財政の安定化に伴い、必要な人材は確保し教職員組織の体制強化を行い、併せて人事制度の改善を図る。
- (7) 経営意思決定のガバナンスを強化する。
- (8) 内部質保証体制の充実を図る。

I. ICUのエートスの継承と発展

- (1) ICUの献学の歴史や理念の普及活動
- (2) ICUが掲げるキリスト教への使命の実践に対する支援
- (3) キリスト教委員会の理事会常設
- (4) オープンハウス等を通じた、教職員と学生との人間的な対話の活性化
- (5) 同窓会を中心とした在学生と卒業生の交流の活性化

II. 教育に関する目標と計画

1. ICUが提唱するArts and Sciencesの推進（教養学部）
 - (1) 次世代に対応したリベラルアーツ教育の推進
 - (2) 環境研究、情報科学、日本語教員養成、サービスラーニングの分野における教育体制の強化
 - (3) リベラルアーツ教育における学問的多様性を保証するための学長裁量による教員の採用
 - (4) メジャー制のレビューと再編の検討（適正な科目数の検討）
 - (5) IDメジャーの強化、サステナビリティのための施策の検討
 - (6) 第一言語が日本語ではない学生の学びの充実化のための日本語教育プログラムの改革

- (7) リベラルアーツを支える基盤としての共通リベラルアーツプログラム群の連携強化
- (8) 学修成果の可視化とそれを通じたリベラルアーツ教育の充実
- (9) 卒業後のキャリアについて「学ぶ」ICUらしい仕組みの創設

2. 教学分野における国際化を推進するための施策

- (1) Center for Global Education (CGE) の機能を拡充し、海外研究者によるコースの提供等、教学の国際連携を柔軟に実施できる体制を整備
- (2) 日英バイリンガリズムの理念に沿ったカリキュラムの構築
- (3) 交換留学、語学留学提携校の更なる充実
- (4) アジアをはじめとする諸外国との国際共修プログラム等の充実

3. 多様なバックグラウンドを持つ入学者を選抜する制度の強化

- (1) 高大連携の一層の推進
- (2) 奨学金制度の充実
- (3) 海外からの志願者の拡充
- (4) 現行入試制度の検証と新たな入試制度の検討

4. 大学院

- (1) 博士後期課程：研究進捗管理、修了後のキャリア支援拡充
- (2) 5年プログラムの現状評価と改善に向けた施策の策定
- (3) 学際的博士前期課程プログラムの検討

Ⅲ. 全学生に対するキャンパスライフの充実とリビング&ラーニングの推進：海外のリベラルアーツ大学をモデルとする

- 1. 寮の拡充：教育寮の意義を確認しつつ、中期的に寮の拡充を検討し、献学時の理念である全寮制の可能性を含めた長期ビジョンを策定する。
- 2. リトリート等、学生同士、教職員と学生が対話できる環境・機会の整備
- 3. 寮生以外の学生も含めた生活の質向上支援
- 4. 課外活動支援の拡充
- 5. 卒業生との交流の活性化

6. 多様性を包摂する支援体制の強化 4.
7. 上記(1~6)を検討するための検討委員会（キャンパスライフ検討委員会（仮称）、総務理事、学生部長、学生サービス部長、財務理事、事務局長他による）の設置。併せて、米国のリベラルアーツ大学の先行事例の研究を行う。

IV. 研究・学術交流に関する目標と計画

1. 研究所・研究センターの研究活動
 - (1) 学術的、社会連携的な発信力の強化

2. 専任教員採用プロセスとテニユア制度の見直し
 - (1) ICUに相応しい教員を採用し、育成するための制度作り

3. 学術的プレゼンスの顕揚
 - (1) 競争的研究資金への積極的な申請と高水準の採択率の維持
 - (2) 「ICU学派」と称されるような独創性のある研究の遂行

4. 研究活動における国際交流・連携
 - (1) 研究所・研究センターとCGEとの連携による、国際研究拠点の構築

5. 大学間連携
 - (1) 理念を共有し、教職員や学生の交流や指導において協働できる連携先の開拓

6. 研究支援
 - (1) 質の高い教育のための充実した研究活動への支援
 - (2) 研究支援体制の強化

V. 社会・地域との連携

1. ICUの教育理念に適合する産学共同プログラムやプロジェクトの創設と推進
 - (1) 持続可能な社会づくりへの貢献
 - (2) 教育研究における地方自治体との連携の持続と強化
 - (3) ICUの人的資源を活用した多様な活動の展開

2. JICUF との連携

- (1) ICU と JICUF で共有するミッションを実現するための、Common Good の精神に基づいた包括的な連携の深化と発展
- (2) ICU と JICUF のユニーク（独特）な関係性を生かした、「明日の大学」のための実験的なプロジェクトの開発
- (3) 米国大学の事例に基づいた大学運営に関する知見の取得

VI. 同窓生との連携

- (1) ホームカミング等の同窓生が大学を訪れるイベントの充実
- (2) 同窓会との協力体制の深化
- (3) 大学運営・学生支援への同窓生の参加促進

VII. Alumni Giving Cycle の確立

- (1) 寄付によって支えられていた ICU の歴史を学生・教職員へ周知
- (2) 卒業生への Pay Forward 精神の喚起

VIII. 大学運営

1. 経営意思決定のガバナンス強化

- (1) 幹部会への常務理事の参加
- (2) 理事会・評議員会に対する情報共有の強化
- (3) 重要なステークホルダーである JICUF との対話強化
- (4) 卒業生に対する大学経営・教育研究の説明の充実
- (5) IR の基礎となるデータベースを整備し Fact Book を作成
- (6) 組織横断的に対処すべき課題についての責任者（CX0）の明確化

2. 教職員組織の強化策の検討

- (1) 職員配置の適正化を図りつつ、必要に応じて職員を増員
- (2) 人材開発・（360 度評価を含めた）評価・報酬を含めた職員人事制度の改革

3. 教職員アンケートによる定期的な意識調査

4. 時代に即した体制整備の検討（IR 部門の強化、DX の推進、DEI の推進など）

5. 事務組織の効率化と働き方改革

- (1) AI を積極的に活用した業務フローの見直し、事務の効率化・迅速化・簡素化の推進
- (2) 入学前から卒業後まで一貫した大学共通システムの導入による効率化
- (3) 教職協働の強化
6. 大学運営への学生参画
7. 人権等の問題に迅速に対応するための体制構築
8. 内部質保証体制の充実
 - (1) 学長のリーダーシップによる Liberal Arts 教育の成果測定方法に関する研究
 - (2) 大規模卒業生調査の実施
 - (3) 教養学部長、大学院部長、学生部長の計画及び活動報告

IX. 財務関連

1. キャンパス内のすべての施設について修繕計画を策定
2. 本計画の施策実施に伴う費用増は学費の変更で賄いつつ、奨学金の充実を図る。

X. その他

1. ICU の環境資本、文化資本の活用の活性化と情報発信の強化

以上